

ず〜むあっぷ☆ オホーツク

有機栽培の大豆（やむべつメーメーファーム）

No.87

農林水産省
北海道農政事務所
北見地域拠点

有機栽培

土のため、未来の担い手のため

やむべつメーメーファーム

火山灰が堆積してできた黒ボク土を主体とし、有機物が豊富な土壌を持つ小清水町の止別（やむべつ）に、「やむべつメーメーファーム」があります。この農場は、2006年に親元就農した和田徹（とおる）さんと、結婚を機に就農し現在は小清水町議会議員も務める妻の彩（あや）さん、そして徹さんのご両親の4人で営まれ、総面積は約34ヘクタールにも及びます。

また、化学的に合成された肥料や農薬を使わない有機JAS認証を取得しており、その中でもライ麦や大豆、小豆などは肥料を全く使用せず栽培されています。

和田徹さん（右）と彩さん

有機栽培に取り組み始めたきっかけ

20代の頃から有機栽培に関心を持っていたという徹さん。約10年間は小規模な面積で試験的に取り組んでいたものの、大きくは踏み出せずにいました。そのような状況を大きく変えるきっかけとなったのが、音更町で有機栽培を実践する中川泰一さんとの出会いです。

有機栽培は、病害虫対策や草取りの手間が大きな課題となるため、大面積での作付けは難しいとされています。しかし、中川さんは独自の発想と理論により、有機栽培としては常識を覆すような55ヘクタールもの大面積を、ほぼ一人で管理し美しい畑を維持していました。その姿を目の当たりにした徹さんは、「自分にもできるかもしれない」と、有機栽培が絵空事ではなく、現実的な選択肢になったといいます。

次世代のために

それ以来、有機栽培への転換を少しずつ進め、現在では申請中を含め、農場の大部分である約29ヘクタールの面積で有機JAS認証を取得するまでに至りました。徹さんは、

「たくさんの農家が有機栽培に取り組み、それだけ多くのデータが蓄積される。今は周囲で取り組んでいるのは自分たち含め少数だが、たくさんの農家でやればそれだけ多くのデータが得られる。それが次世代の農業のためになる！」と語り、地域全体での有機栽培の広がり期待を膨らませています。

農業の魅力と今後について

**「自営業だからこそ、自らの責任で好きなことに挑戦できる」（徹さん）、
「自分たちが作った、美しい景観に囲まれて暮らせることが幸せ」（彩さん）」**
農業の魅力について、和田さんご夫妻はこう語ります。

その言葉を体現するように管理された畑は、慣行栽培と比較しても見劣りしない生育を誇るとともに、素晴らしい景観を生み出しています。

近年、農家の高齢化や担い手不足から農業の大規模化が進む中で、慣行栽培では農業機械や農薬などに多額の初期投資が必要とされます。一方、有機栽培ではそのコストを大幅に抑えることが可能です。**「大規模な有機栽培が可能であることを自ら示すことで、参入のハードルを下げ、新規就農者にとっての選択肢を広げたい」**、そんな思いを胸に徹さんと彩さんは、人とのつながりや家族との時間を大切に、余力を残したゆとりある経営を最優先にしながらも、将来的には「やむべつメーメーファーム」すべての圃場を有機栽培に転換することを目指しています。

